

「なぜ」から始まる授業 — 仲間たちとともに

Saito Kazuharu 日本福祉大学 齋藤 一晴

【初めての感覚

将来、教員として教壇に立つことを夢見る大学生にとって、授業を構成する力をどう身につけるかは、大きな壁として彼らの前に立ちはだかっている。なぜなら、大学に入るまで、暗記や穴埋めの授業を中心に受けており、教科書そのものから授業の楽しさを感じた経験が乏しいからである。

学び舎の教科書を手にした学生は、まず、各節のタイトルに驚く。一般的な教科書であればサブタイトルであるはずのものが、メインタイトルになっているからだ。例えば「都で、武士が戦う — 院政と平氏政権」、「繭から生まれる — 殖産興業」などである。学生の驚きは、次第に、どうしてタイトルを工夫しているのだろうという問題意識、つまり「なぜ」へと変化していく。

【「なぜ」から始まる授業

「なぜ」から始まる授業をいかにつくるのか。どうすれば生徒に「なぜ」をつくれる教員になれるのかといった思いが彼らを教材研究へと進ませていく。

学生たちにとって、小学校から使ってきた教科書という存在は、いわば聖典だ。それは権威でもあり、疑う余地のない完全無欠なものとしても映っている。しかし、学び舎の教科書が生まれた背景に全国で長く積み重ねられてきた授業や、教員の子どもたちへのまなざしがあることに気づくと、学生は教科書「を」聖典として教えるのではなく、教科書「で」教えることにどのような意味があるのかを自覚するようになる。

【「なぜ」を深める方法を学ぶ

学生たちは、「なぜ」の大切さに気づくと、次にそれを深める方法が分からず悪戦苦闘することになる。学び舎の教科書には、各章の終わりにふりかえりがあり、「歴史を体験する」という部分がある。例えば、「山本宣治の人物調べ」(p.220)では、調べ方から調べた情報を精査するポイント、さらには発表の方法にいたるまでを、実際に生徒が作成したポスターを明示しながら説明している。

学生たちは、誰にでも正答を与えてくれる教科書ではなく、自分だけの「なぜ」について深める方法を具体的に知ることができる学び舎の教科書に魅力を感じている。

【「なぜ」を仲間たちと共有する

学生たちは、生徒の「なぜ」を仲間たちと共有することが授業に求められていることに気づくと、指導案の作成や模擬授業でも、自然と仲間と共有したことを表現する時間を設けるようになる。そして、仲間の意見やときには自分の考えと異なる発言にも耳を傾けることを楽しむようになる。

このように、学び舎の教科書から学んでいるのは、なにも中学生だけではない。そう遠くない将来に中学生と向き合うことになる学生たちが、みずからの教材観や授業観、生徒への視野を広げていくために活用している。それは、学び舎の教科書が、まさに「ともに学ぶ」存在であることを示しているだろう。